



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	J・プラムナッツ「政治理論の効用」
Author(s)	荒木, 俊夫; ARAKI, Toshio
Citation	北大法学論集, 14(1), 158-173
Issue Date	1963-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16026
Type	departmental bulletin paper
File Information	14(1)_p158-173.pdf



紹介

J・プラムナツツ「政治理論の効用」

荒 木 俊 夫

この数年間、イギリスやアメリカにおいて「政治理論の衰退」という問題をめぐって多くの議論がなされてきた。ここに紹介するJ・プラムナツツ「政治理論の効用」(John Plamenatz: The

Use of Political Theory. Political Studies Vol. 8 No. 1 1960)

は、この問題をあつかった最近の議論の一つである。ここで使われている「政治理論」という言葉の意味は論者によって微妙な相違があり、正確な定義を与えることはむづかしい。しかし、一般的に、それは政治研究における道徳的関心、政治活動の価値判断に関係していると云うことは出来る。プラムナツツの場合には、政治理論とは「政府の目的に関する体系的考察」「政府に関する実践哲学」であると一応の定義が与えられている。この論文は政治科学や概念分析的政治哲学の進歩によって、「伝統的」政治理

論の活動の余地はなくなったという議論を反駁し、政治理論の存在根拠を説明し、それを擁護しようとしたものである。

政治理論の存在根拠を否定する諸々の見解は誤った議論に立脚しているとして、プラムナツツはそれらを批判することから始める。まず政治理論を否定ないし軽視する議論は政治科学との関係において論じられている。過去の政治理論は、二つの活動の混合物であった。一つは政府はいかにして機能しているか、それはいかにして生まれたものであるか、何故人々はそれに服従しているか、このような問題を説明する活動である。もう一つは、政府は何を目標とすべきか、それらの目標を達成するために政府はいかに組織されるべきか、このような問題にある解答を与えようとする活動である。これらの二つの活動は、全く異った種類の活動で

あって、二つは明確に区別されなければならない。前者についての理論は検証可能であり、多かれ少なかれ、我々の知識を増大しようとする試みである。これに反し、後者についての理論は単なる「好み」の表現であり、したがって我々の知識を増大させるものではない。そればかりか、それは知識の増大を阻害してきた。過去の政治理論家たちは、彼らが望ましいと考えるものを正当化するような概念をつくり出すことによって、事実についての科学的説明を混乱させた。ただ、それらはこれまで事実上、人々に真面目に受けとられ、彼らの行動に大きな影響を与えてきたという理由で、研究されなければならないものであるにすぎない。このような議論に対しプラムナッツは、政治理論が政治科学と同じ種類の知識を生みださないとしたこと、政治理論が政治科学の進歩を妨げたことがあったということは認める。しかし、このことを認めることは、政治理論が幻想であるとか、「好み」の単なる吹聴にすぎないものであるとしてそれを排除する理由にはならない、と彼は云う。それはただ、二つの異った活動を区別する理由にないだけである。

次にプラムナッツの批判は、概念分析的政治哲学の観点から政治理論を否定する議論に向けられる。ウェルドンのような人によれば、政治哲学者といわれてきた過去の偉大な思想家の試みたも

のは、無価値であるということになる。政治哲学者を悩ませてきた問題の多くは、その真偽性がいかなる経験的事実によっても検討され得ないという意味で「にせもの」であり、それは思考の混乱と言語の誤用によって生じたものである。彼らのもっともらしい体系に言語分析という溶剤をかけ、ドロスがとけてしまった時残ったもので価値あるものはほんのわずかである。政治哲学の唯一の有益な機能は、言語の誤用より生ずる思考の混乱を是正するための政治的概念の分析である。—このように「現代の哲学者」は云う。確かに政治思想家はいまいな概念を用いて来たし、未だ用いている。したがって、この混乱を是正しようとする言語分析は重要である。分析的哲学者は、ルソーの一般意志やヘーゲルの国家の中に無意味なものを見つけたし、何故に、それらは無意味なものになるかを示そうとする。その限りでこの種の哲学者は有益である。しかし、彼らはこれよりさらに進んで、彼らが無意味なものを見つけたところには、およそ意味あるものは存在しないと容易に結論しがちである。しかし、ルソーの中に無意味なもののみつけるためには、言語分析の技術を必要とするように、ルソーの中に意味あるのみをつけるためには、多分、社会学や、心理学の知識を必要とするだろう。この意味で、彼らは、彼らの「哲学」の限界をふみ越えている。しかも、今日の自然科学者が

彼らの観念や方法をつくり上げるのに、この種の哲学が役立たないように、やがて、政治科学者はそれを必要としなくなるかもしれない。

これら二つの議論はいずれも、政治科学と概念分析的政治哲学以外には、体系的理論家によってなされるに足る重要にして有益な活動はなにもない、と云うとしている。しかしながら、政治科学、言語分析、政治理論、これら三つの機能はそれぞれ異なるものであって、前の二つのものをもって政治理論の機能を代用することは出来ない。いいかえれば、それらがいかに成功したとしても政治理論への要求を満足させることは出来ない。プラムナッツは政治理論をなんらかの意味で否定するすべての議論は、この要求を無視することから生まれる、と考える。この観点から彼は、政治理論に関するマルクスとパークの見解を批判する。マルクスは政治理論をイデオロギー、即ち虚偽意識の一形態と考え、真の知識を我々に与える科学をそれと対比させた。そして、彼は我々が真の社会科学を持ち、イデオロギーを不要とする時代を展望した。しかしそれにもかかわらず、彼はイデオロギーに重要な意義を附与せずにはいられなかった。階級は、それが政治的に有効であるためには、イデオロギーを持たなければならない。イデオロギーがたとえ幻想であったにしても、もし人間がこれらの幻想を

持っていなかったならば、社会の発展のコースは今日あるようにはならなかったであろう。イデオロギーの製作者はそれを科学であると誤解した。それ故、科学がそれ自身のものとなる時イデオロギーの存在余地はなくなるであろう、というマルクスの議論は誤った論証の仕方である。他方、パークは政治理論をそれが既存の秩序を正当化する時以外には有害なものとみなした。このことは、少なくともその重要性を認めたことになる。しかし、パークは政治理論の機能を明確にみなかったが故に、フランス革命を誤解する結果となった。彼はこの革命を、哲学者たちによって誤って導かれた人民がひきおこした大いなる不幸とみなした。しかし革命の直接の原因は、非特権階級が社会に対して新しい要請を提起し、この要請は社会が大きく変らなければ満たされることが出来なかったということにあった。非特権階級がこれらの要請を提起しようとする気持を醸成したもろもろの条件を、哲学者たちがつくり出したわけではない。彼らの仕事は、これらの要請を定式化し、それらを体系的に説明し、これらを満たすことの出来ない旧い社会を非難することであった。したがって、社会を混乱させたといつて哲学者達を罵ることは無益なことであった。確かに彼らがつくった理論へのあらわな要求は始めから存在していなかった。しかし、理論が現われた時にはすでに、それを認めようとする

る用意が社会の中に出来上っていた。この意味で理論への要求は存在していたと云うことが出来る。パークは——とプラムナツは云う——この要求を理解しなかったという点で、マルクスは、社会研究が科学的になる時、この要求はあたかも消滅してしまうかのよう語っている点で、それぞれ誤っている。では政治理論へのこの要求とは何か、どうして、この要求は社会科学の発達によっても弱められたり、消滅したりするものではないのか。プラムナツは政治理論を「政府に関する実践哲学」と定義する。そして政治理論への要求を「実践哲学への要求とおきかえてこの「要求」の意味を説明する。

未開社会においては、慣習や偏見（行為者が身をまかし得ると考える正しい行為についての信仰）が、十分行動の指導原理になり得たと云える。そこにおいては、人々は体系的な実践哲学なしにやっていくことが出来た。未開社会の研究者の洗練された眼からすれば、未開社会の慣習や「偏見」は首尾一貫した全体を形成しているように見えるが、未開人の眼からすれば、それは首尾一貫した全体でなくて、単に慣れ親しんだものの全体であるにすぎない。彼はそれらが相互に調和し合っているかどうかを気にかけない。それらが事実上相互に調和し合っているが故に、彼は隣人に対しても、自己自身に対しても気楽に生活してい

るにすぎない。だが洗練された人間にとっては、単に事実上首尾一貫しているにすぎない一組の慣習や「偏見」では十分でない。彼は変化する社会に住み、その社会の中で社会的に流動している。彼がさらされているこの変化は、彼がそれを知覚することが出来ないようなゆっくりとした変化ではない。さらに、彼の住んでいる社会は、人々が意識的に自分たちの制度をつくり変えようとしている社会でもある。このような社会に住む人間は道に迷わないためには、社会の中で自分の位置を確かめることが出来なければならない。そのためには、この社会はどのようなものであるか、それはいかにして変化しているかということを理解するだけでは足りない。彼は首尾一貫した価値体系を持ち、それを用いて生起するものを評価することが必要である。即ち彼は実践哲学を必要とするのである。プラムナツのこのような議論からして、実践哲学は社会的人間の根元的要求に根ざしていると云える。（なぜなら、今日我々もはや静的、固定的社会を将来において想定することは出来ないから）

ところが、最近になってかかる実践哲学の価値が低下しているかのように思われる。このような事態はいかにして説明されるべきか。過去において、実践哲学は宗教や形而上学に基づけられていた。人々は、彼らがいかに行動すべきか、政府はいかにして

組織されるべきかということに関する信念を、人間に対する神の意図や世界の本質や合理的被造物としての人間から引き出している。ところが、宗教や形而上学の教義の多くのものは、科学や論理学の発達によって反撃されるにいたった。それらは事実上適合しないということ、思考の混乱や誤った論証に基づくということが示された。とはいっても宗教的・形而上学の教義のすべてが、直接に論駁されたわけではなかった。これらの教義の多くは通常の経験の領域を越えたところにあると考えられている實在の領域に関係していたからである。いわば、それらは科学の領域を越えており、論理学は自己矛盾におちいらぬ限り、それらに触れることは出来ない。しかしながら、科学の普及によって人々は特に関心はこれらの教義さえ拒否する傾向を持つようになった。彼らは、科学が誤りであるということを示すことが出来るものばかりでなく、科学が真理であると示さないものまでも拒否する。世界に関して検証不可能な信念と検証可能な信念の両方を持つことは、し前者が後者に矛盾しないならば、なんら非合理的なことではないはずである。しかし人々は、そうすることは困難だと感じ、証拠のない信念は、すべて拒否する必要があると考えるにいたった。宗教と形而上学のこのような衰退にともなって、これらと極めて長い間結合していた実践哲学の価値低落が進行した。こ

の経過を次のような例で説明することが出来る。「すべての人間は神の眼からみれば平等である」ということは、人間に向けられた神の感情、神の意図についての言明^{エーラント}である。それは事実についての言明であって表面的には、価値判断ではない。それは記述的であって命令的ではない。が、それは検証不可能である。人間はいかに行為すべきかということについての信念は、神の感情や意図についての言明そのものから論理的に引き出されない。人間は彼らに向けられた神の意図を促進するように行為すべきであるというもっと一般的な仮定がなされる場合にのみ「すべての人間を平等にあつかうべきである」という信念が引き出され得る。したがって、逆に人が神を信ずることをやめたからといって、この信念を必ずしも拒否することにはならない。しかしながら、彼が神を信じなくなる時、彼はこの信念を強く持つていようとは思わなくなる。

このような意味からすれば、確かに、科学の発達には宗教や形而上学の衰退の要因であるし、宗教や形而上学の衰退は、それらと結びついてきた実践哲学への関心を衰退させた、と云える。しかし、プラムナツツによれば、この過程は一種の心理学的傾向の因果関係によって結びつけられているのであって、論理的に妥当な関係を意味するものではない、ということになる。ところが、あ

る人々は、このような過程を前提として、次のように議論を進める。道徳的原理は常に存在しているし、将来もまた存在するだろうということは認める。したがって、それらが何であるか、いかにして生ずるのかということの研究することは価値あることである。しかし、体系的な実践哲学を精密につくり上げる仕事は、現に軽視されている。その仕事は、神学者や形而上学者がこれまで行ってきたことであり、彼らが未だ行っていることでもある。その仕事は彼らにとって意味があるかもしれない。だが、科学的精神によって鼓舞された人々にとって、一体それはどんな意味を持ち得るのか、と。

実践哲学に対するかかる態度は全く誤っているとプラムナッツは云う。確かに一方では、宗教や形而上学に関係して来た実践哲学に対する関心の衰退という事実、(これは、決して論理的に妥当なものではないが)はある。しかし、前述したような社会的存在としての人間から生まれる実践哲学への要求は神や世界や人間についての信念から普遍的な原理を引き出すことが出来るかどうかに関係なしに依然として存在する。否、社会的流動性の増大とともに増々大きくなるとさえ云える。この決定的な側面を見ないという点で、実践哲学を無用視する態度は、致命的な誤りをおかしている。プラムナッツはこの点を、近代人の自己意識という観点

から、再度強調する。近代人は、過去の人々のように社会の中で固定した位置をもっていない、彼ははるかに急速に変動する社会の中にあつて、はるかに社会的に流動的である。したがって、彼は単に慣習に身をまかせ、固定した位置についての「偏見」をもつことによってだけでは、もはや世界に親しむことは出来ない。

彼は、世界に自己を親しませなければならぬ。世界に自己を親しませるとは何を意味するか。自己意識的・洗練された人間が自己についていづく観念は、単にあるがままの自己について彼が知っているもの、あるいは知っているものからのみ成るのではない。この観念は、彼がやりたいと望むもの、即ち彼の抱負アズレレコフからもまた成っている。確かに彼は、彼がやりたいと望むものではない。彼は現にあるがままのものである。しかし、彼が自己についてもイメージは彼がやりたいと望むものに大いに依存している。それは、彼を批判的にさせ、あるいは自己批判的にさせる、社会に彼が住んでいるからである。が同時に、このことは、幸福であるためには、彼は抱負を持たなければならぬということの意味する。慣習に従い、「偏見」を承認しながら、その日暮をすることによって、彼は幸福であり得ない。さらに、単に抱負を持つだけでなく、この抱負は、彼がそれに従って行動出来ると感じられるものでなければならない。彼は自己のイメー

ジに忠実でなければならぬ。いいかえれば、手に入れることが不可能なもの、あるいは相互に両立し得ないもの、あるいは他人との争いを引き起さざるを得ないような野心を彼が持とうとするならば、彼は幸福ではあり得ない。彼が自己を世界に親しませる、ということとは、このような意味での抱負を持つということである。ところが、彼はこの抱負を科学、あるいは社会科学からさえも得ることは出来ない。彼はそれを実践哲学から得るのである。

実践哲学者の仕事は世界に生じたことを説明すること（科学）ではない。彼の仕事は、我々がいかに言語を用いているか、我々がいかにして知識を得るか、我々が道徳的・美学的判断を下し、あるいは、決定をしている時、我々がやっていることは厳密に云えば何であるか、ということの説明すること（概念分析的哲学）ではない。彼の仕事は、原理の一貫した体系をつくり出し、人々がそれに従って生きて行くことが可能であるためには何がなされる必要があるかを確立することである。さらに、人々が彼らの理想に近づくように社会的環境を変えることが出来るという観念に慣れようになればなる程、益々実践哲学において、社会的・政治的思想の占める役割は大きくなる。即ち現代の実践哲学は不可避的に政治理論となる。その仕事は原理の首尾一貫した体系を政府

に関係させ、政府はかかる原理を実現するために何をなすべきか

いかに組織されるべきかを我々に語ることである。この目的を達成するためには、それは、体系的であり、首尾一貫性を持っており、現実主義的であるばかりでなく、宣教師によって語られるごとく、確信をもって語られなければならない。政治理論家がさまざまな観念やそれらの論理的帰結を整理し、人々に提示するだけにとどまるなら、彼は人々の決定を助けるのではなく、かえって彼らを混乱させてしまうだろう。人々をして当惑させ、憂うつにさせるのは、知的エリートの間、強力に主張されている確信がさまざまあるということではなく、彼らに確信が欠如していることである。確信を持って語られない実践哲学は、人々を当惑させ、悩ませ実践哲学への要求そのものを満足させることは出来ない。

しかし、いかなる実践哲学・政治理論といえども普遍的に承認され得るものではないであろう。人々がこれこれの原理を理解しさえするならば、あるいは、人間の本性が何であるか、または何になり得るかを理解しさえするならば、彼らは全てこれらの原理を承認するだろう——と我々が云うことが出来る原理というもの、多分存在しないだろう。それにもかかわらず、政治理論家は宣教師のごとく語らなければならないというならば、それは危険なことではないだろうか。しかし、思想の自由は——とプウムナ

ツツは云う——思想家が診断と選択の対象になるいくつかの理論を提出することによって維持されるのではない。それはさまざまに思想家が等しい確信を持って、それぞれ異なる理論を提出することによって保証されるのである。寛容を信ずるカソリックやプロテスタントは、まず自由主義者であって、しかる後にカソリックあるいはプロテスタントであるのではない。そして寛容な信者は、非寛容な信者よりも、信仰の熱烈さの点でおとるとは云えないであろう。

プラムナッツの議論の主要な目的は、政治科学や概念分析的政治哲学の進歩によって、政治理論の存在の余地はなくなったという見解を批判することにあつたと云えよう。彼の議論は、二つの段階に分けて考えることが出来る。第一に、科学(や言語分析)がいかに進歩したにしても、このことによって満たれない人間の要求がある。第二に、実践哲学としての政治理論は、この要求に答えようとするものであるから、それは単なる「好み」の主張ではない。第一の議論の検討から始めよう。

科学は経験的事実によって検証可能な命題の総体から成る。「古典的」政治理論を言語分析という濾過装置に通すと、これらの教

義の中に経験的事実によって検証不能な命題の多くが指摘される。ここから、政治理論は科学的知識をほとんど増大させるものではなかった、という結論を導き出すことは正当である。だが、このことは、「政治理論が提出してきた問題は無意味であって、その非科学性が明らかになった今、もはやそれは必要ではない、政治科学と概念分析的哲学だけで十分である」という見解を支持する理由になるだろうか。ここで、プラムナッツはもろもろの知的活動の背後にあつてそれを支えている人間の要求という観点からこの見解の意味を考察する。そうすれば、この見解は、「科学の発達によって政治理論への要求が消滅するだろう。あるいは、科学がその要求を満たすことが出来る」という議論に帰着する。これは明らかに誤った臆断にすぎないとプラムナッツは云う。彼は政治理論の核心を実践哲学としてとらえ、実践哲学がいかに今日の人々に必要とされているかを明らかにしようとする。自己の住む世界に親しむということは、人間が生きてゆくための根本的な要請である。未開社会、より一般的に云えば、固定した社会に住む人間は、ただあるがままの「偏見」や慣習に従うだけで世界に親しむことが出来た。この「偏見」や慣習の全体が、彼らの指導原理であつたが、それは自然にあるがままのものであり、単に事実上首尾一貫した体系であるにすぎない。これに対し、変化する社会

に住む人間にとって、世界に親しむアイトホムということは、自然的状态でなく、「作為」的な行為である。「彼は世界に自己を親しまなければならぬ。」すなわち、彼が従う指導原理ガイダウリは自然に存在するものでなく、人間が創るものである。指導原理は、それが人間の行為を導くことを目的とするものである以上、単なる事実についての

言明でなく、規範的要素を含んでいる。(プラムナッツはこの規範的要素を「抱負」という言葉で表現している。)さらに、指導原理は元来一貫性がなければならないが、それが人間によって創られる場合には、体系化するという困難な知的行動としてなされなければならない。このように、変化する社会に住む人間は、世界に親しむという人間としての根元的な要求から、いわば抱負の原理の体系、即ち実践哲学を必要とするのである。実践哲学の必要は社会的流動性に基づくものであり、社会の流動性は、自然科学や社会科学の発達に伴う技術の増大によっていっそう促進されると考へることが出来るから、実践哲学の必要は、科学の発達とまさに平行して進むと云るだろう。この人間の要求に答へる仕事は、政治科学の行い得るものではない。なぜならいうまでもないことであるが、「抱負」の体系化という仕事は、本来的に価値判断であり、したがって経験的事実によって検証不能なものであるからである。しかし、「世界について検証不能な信念と検証可能な信念と

の両方を持つということは、もし前者が後者に矛盾しないならばなんら非合理的なことではない。人間は科学が答へ得る領域の外でも、生きなければならぬ。そしてこの領域にある人間の要求に答へようとする実践哲学が、経験的事実によって検証され得ないという理由で拒否することは、むしろ論理的な誤でさえある。

このようにしてプラムナッツの議論を見て来ると、彼の議論の核心は、科学万能主義批判サイエンティフィシズムにあると云うことが出来る。科学が人間のすべての問題を解決することが出来るという積極的な科学万能主義を見ることが、まれであるが、科学以外のものはすべて無意味であるかのように振舞う消極的なそれは、今日いたるところで見ることが出来る。それは意識的に断言されるよりも、未来における科学の発展の予感にささえられ、一種のムードとして広く存在していると云える。

かかる科学万能主義は、政治研究の場合にもちこまれる場合には、単に誤っているというだけでなく、倫理的に危険な意味を持つように思われる。政治現象の研究に自然科学の方法を適用し、しかもこのような方法での研究のみで十分であるとすると態度は、自然現象の研究と社会現象、特に政治現象の研究との本質的な相違を見失っている。科学の目的は事物が如何にして起きたか、因果系列においてそれが何故生じたかを示すことにある。その知

識は事物に対する人間の支配の力を増大させる。すべての自然科学者が、彼らの知識が実際に適用される場合の有用性のために、彼らの研究を進めているわけではないが、自然科学に払われている尊敬は、自然に関する知識の増大が自然を支配する力の増大であり、この力の増大そのものは、人間にとって善であるという信念に基礎づけられているということは確かである。また、経済学における、「倫理的中性」は一定の倫理的前提をとることによって可能であった。善い結果は、経済的行為者の欲求が活潑であることから生まれるであろうと考えたから、経済学は彼らの動機を無条件に承認することが出来たのである。いいかえれば「経済学者が倫理的無関心をもって現象に直面出来たのは、彼らが倫理的に去勢されていたからでなくて、行為者の倫理的関心や啓蒙に關係なしに、望ましい倫理的结果を期待するからである。」¹⁾しかし、政治現象の研究に、このような前提をおくことは明らかに不可能なことである。政治科学によって得られた知識は人間に対する支配の力、即ち政治技術を増大させる。この政治技術は、常に善い目的に使われるとは限らないし、善い結果を伴うとは限られない。我々か何が政治的善かということを決定的ことを政治科学は助けられないものであるなら、政治研究はこの間に答えようとするものかには導かれなければならないだろう。

次に、政治理論は人間の根元的要求に答えようとするものであるから、単なる「好み」の主張ではない、というプラムナツの議論を検討してみよう。この議論は価値についての論理実証主義の見解と関係している。ここでは論理実証主義を次のように定義しておく。「事実と価値との間には根本的な相違があり、科学が資格を持つのは事実判断だけで、価値判断は避けられなければならない。価値は好ましいと思われたものや好みについての原理にすぎない。」この立場は、科学万能主義と實際上、極めて親近性があり、前者から後者が生まれて来る可能性は大いにある。プラムナツ自身は、ほとんどこの両者を区別していないように思われる。しかし、両者は論理的には区別されなければならない。なぜなら論理実証主義者は次のようにして、科学以外の信念について語る事が出来るからである。「わたしは、善い生活についてのわたしの意見が正しいと証明することは出来ない。わたしは、わたしの見解を述べる事ができるだけであって、なるべく沢山のひとに同意していただきたいと思うばかりである」と。²⁾このように、人間を導く指導原理はその真偽はもとより、科学的に証明され得ないが、人間にとって必要であることを認めるかもしれない。しかし、この場合、それはあくまで個人の「好み」にすぎないから、行動原理をうちたてる仕事は研究者がその体系化のために献身す

るに於たいするようなものではない。このような立場に對する批判はプラムナツツによって直接展開されているわけではない。しかし我々は彼の議論の中からそれへの批判を構成することが出来る。実践哲学は變化する社会に出きる人間が、世界に自己を親しませるために、必要とする抱負の体系である。それは彼の行動を現実に導き得るものでなければならず、単に彼が好ましいと思つてゐるものではない。単に好ましいものを指導原理にすることは論理的には可能であるかも知れないが、それはかえつて彼が世界に親しむことを妨げるかもしれない。したがつて実践哲学においては抱かれた抱負がはたして世界に自己を親しませるといふ人間の根元的要求を満足させるものであるかどうか、という反省の契機が常に存在しなければならぬ。この点で、プラムナツツは実践哲学を単なる「好み」にすぎないといふ立場を批判することが出来る。

ツライネトケイブツ
洗練された論

しかし、このような抽象的な批判は、より
 理実証主義者、(例えばウェルドン)が行う政治理論への攻撃を論駁するには不十分であろう。彼らが「古典的」政治理論を否定する際に、彼らの議論の力点はそれが好みの主張にすぎないといふところにあるのではない。力点は価値についての論争は、科学万能主義と異なつた意味において不必要だといふところにある。彼

らはむしろ価値判断と考へられている一切のものが、単に個人の好みに過ぎないといふ見解、より嚴密に云へば、一切の評価語が単に個人の心理状態を述べているにすぎないといふ見解を批判している。評価語はそれが述べられた、具体的な状況との關係で分析されるならば、それはなんらかの事実についての言明であることが明らかになる。政治的・道徳的評価は經驗的判断である。従来、価値についての論争だと考へられてきたものの多くは、実はみせかけの論争であつて、それらの多くは事実についての論争に還元し得るであらう。このように彼らは主張するのである。しかし、この分析的過程が可能であるのは、彼らも亦認めてゐるやうに、論争の当事者が共に共通の価値体系を前提としてゐる場合に限られる。論争の当事者が事実問題について、すべて一致してゐても、なおかつある行為の価値判断に関して一致に達することがないならば、議論によって相手を納得させようといふ試みは捨てられなければならない。なぜなら、この究極の価値判断は当事者の「好み」の主張であるからである。したがつて我々は次のやうに云うことが出来るだらう。彼らが価値判断は究極的には「好み」であるといふ立場をとりつゝ、このことは決して「懷疑論」に導くものではないと云い得るのは、その背後に今日のヨーロッパで一般的に認められてゐる価値についての肯定と一致について

の深い信頼とが隠されているからである。このような前提に立って、彼らは「価値論」において必要なのは、価値の一般の原理を体系的に展開することではないと云うのである。必要なのは、主張された価値からあいまいさをとり除き、それに明確な意味を与えることであり、具体的状況の中でその実際の諸結果を示すことに役立つ事実的知識を増すことである。研究者はこのことによつて、価値選択に伴う情緒的要素を出来る限り排除することが出来るであろう。ウェルドンのような人が、政治理論をつくることは「厳密で体系的な理論家によつてなされるにたる重要な仕事でない」と考へる時、それはこのような態度に基礎づけられていると云える。

このような見解に対して、価値原理の体系的展開を奨励するプラムナツはどんな批判を行うであろうか。彼は、そもそも、政治理論を否定ないし軽視する議論の中に、このような見解を措定してはいないから、我々は彼の直接的な批判を聞くことは出来ない。しかし、彼の立場に立って、次のように云うことが出来るかも知れない。今日ヨーロッパにおいて一般的に承認されている「価値」を前提にすることは、つまりは「多数の人々の好み」を価値として認めることを意味するだろう。しかし、その保証はどこにもない。もし「好み」という言葉を使うなら「小数者の好み」の方が

価値度があるかも知れない。ある「抱負」の体系が、真に人間が世界に親しむことを可能にするならば、たとえ、それを小数の人々だけが信じていようと、価値である。このようにプラムナツの議論を考へるならば、それは一種の「コンフォミズム」批判であると云うことが出来る。

しかし、一致のないものでも価値であるかも知れないと云うならば、どんな「抱負」でもよいかという問題が直ちに提出されるはずである。「多数の人々の持っている好み」を価値として信頼する場合には、それは価値についての偽客観性に依存しているからこの問題はそれ程尖鋭には提出されないかも知れない。プラムナツによれば、「抱負の体系」は人間を世界に親しませることの可能なものでなければならぬし、それに従つて行動することが他人との斗争へまきこむようなものであってはならない。しかし、もしこのような条件を満たすものであれば、どのような「抱負」であってもよいのか。ここで「抱負」あるいは「価値」の客観性の問題が提出されるはずである。しかし、我々は彼の議論の中に価値の客観性への志向を見ることが出来ない。プラムナツの議論は、「人間は実践哲学を必要とする」ということを論証することにつきてゐる。そして、その際は彼は「神、世界、人間についての信念から普遍的原理を引き出されることが出来るか否かにかかわ

りなく」と云うことによつて、この価値の客観性を追求する道を自ら閉じこめてしまつたように思われる。

これまで、プラムナッツの議論を主にその理論的側面において検討してきた。次に、政治理論を展開せよという要請は現実の状況との対応関係においていかなる意味をもつかという点について二、三の感想を述べてみよう。価値についての論争は事実について論争に還元し得るという前提にたつて政治理論を無用視する議論とプラムナッツの議論とを対比させるならば、彼の議論は一種の「コンフォミズム」批判をも意味することになるといふことを指摘した。我々は「政治理論の衰退」についての今日の議論の中に同様な批判をみることが出来る。例えは、それはイーストンによつて次のように論じられている。今日多くの政治科学者は、価値から自由な政治研究は神話にすぎないということを認めるようになった。そこで、彼らは研究から排除出来ないものは、それを隠しておくのでなく、明らかに示すべきであると考へた。研究者はまず自己の価値的前提の概要を提示し、あるいは「告白」し、しかる後、検証可能な命題の究明にのりだすべきである。このことは、研究者自身、あるいは読者が経験的研究に対する研究者の価値意識の潜在的影響力を判別し、逆に研究者によつて与えられ

る知識の客観性に対する信頼を増すために必要である——このように考えられてきた。しかし「形式的」告白が可能なのは、彼が何を表現したいと思つてゐるかをすでに知つてゐる場合に限られる。ところが、今日の政治研究者はヨーロッパの道徳的前提をほとんど所与のものとして認めてゐる。手段については激しい対立はあるにしても、究極的なものについては一致があるという様に感じられてゐる。したがつて、政治研究者は彼の価値を形式的に告白すればたりるということは、実際には、彼は今日の公認の価値を越える必要はないということを主張してゐることになる。このようにして、イーストンが研究者の価値意識を解明する方法としてとられた形式的告白を批判する時、それは同時に「コンフォミズム」に対する批判でもあると云うことが出来る。政治研究における「コンフォミズム」は、公認の価値を表現する政治観念や原理に検討を加へることを怠る。しかし、現実の社会はたえず変化するから、これらの観念や原理の意味内容が固定されたままでゐるならば、この観念や原理は現実に妨ぎかける力を失うばかりでなく、公認され、擁護されてゐた価値そのものを喪失してしまふかもしれない。しかし、このような危険は、プラムナッツのように政治理論が必要であると強調することによつては、何ら克服されない。彼によれば「抱負の体系」は人がそれに従つて生

きることの可能なものでなければならぬ。すなわち、実践哲学は論理的に整合的であるばかりでなく、現実主義的でなければならぬ。それが現実主義的であるということは、「変化する社会」というコンテキストの中におかれるならば、価値を表現する政治的観念や原理は現実の変化に機能し得るようにたえず「改鑄」されなければならぬということの意味するであろう。この限りでは彼は価値と現実との対応という問題を暗示していると云える。しかし、この問題は、彼が政治科学と政治理論との機能を分離することに力点をおきながら、これら二つの相互関係についてなら言及しないことによつて、決定に弱められている。なぜなら、価値を現実の中で機能させるためには、新たな現実についての事実的知識を与える社会科学が常に必要とされるはずである。したがつてこの点からすれば、政治理論の展開はイーストンが試みたように「価値理論」と「因果的理論」との統一という問題を必然的に提起するであろう。変化した諸条件が生みだすさまざまな要求、社会学者や心理学者や政治科学者によつて与えられた新しい知識それらの要求を満たすために我々が自由に使ひうる技術の発展、これらの光にあてて、政治理論家は政治的観念を再解釈していかなければならぬ。

我々はここで、現実の状況変化に対応する政治的観念の機能変態

の一例として、シュンペーターの新しい民主主義のモデルをとり上げることが出来る。彼は「古典的民主主義理論」を次のように定式化する。「民主主義的方法とは、政治的決定に到達するための一つの制度的装置であつて、人民の意志を具現すべき代表を選出することによつて、人民自らが問題の決定をなし、それによつて公益を実現せんとするものである。」彼はこのモデルが、公益、人民の意志等の實在しないものについての仮定や概念を含んでいるという理由でそれを拒否する。そして、彼は次のように定式化された「もう一つの民主主義理論」を擁護する。「民主主義的方法とは、政治決定に到達するために個人々人が人民の投票を獲得するための競争的斗争を行うことにより、決定力を得るような制度的装置である。」この民主主義の二つのモデルの基本的な相違は、前者が政治問題の決定権を第一義的に選挙民に帰属させているのに対し、後者は、この決定権を政治的リーダーに帰属させ、選挙民の第一義的役割をこの政治的リーダーの選出においている点である。即ち、新しい民主主義のモデルにおいては、政治決定の行爲とこの決定の主体の選出とが分けられ、前者が政治的リーダーに後者が選挙民へ帰属させられ、両者の機能が分化されている。この民主主義理論の機能変態は近代「市民社会」と現代の「大衆社会」との状況変化に対応していると考えることが出来る。人民の自律

的・合理的な意志という古典的民主主義の前提が、事実の問題として崩壊した状況の中で、存在していない条件の上になてられたモデルは、現実の民主主義の作用を説明することが出来ないだけでない。それに固執することは民主主義に内存する価値さえも失いかねない。「マス」の政治決定過程への直接的な参加は、古典的民主主義理論が予想していた人民の合理的判断を通じての人民の利益を実現しないばかりでなく、民主主義の機能をまひさせるかもしれない。他方政治的リーダーは「人民の意志」を操作的につくり出すことによって、彼らの特殊利益を公益の名のもとに追求するかもしれない。このような状況に直面して提出された政治的リーダーと選挙民の機能分化は、政治的判断能力を二つのレベルに分けることを前提するのである。政治決定をなす能力は、政治決定から生ずるであろう将来のもろもろの結果を比較考慮し、決断しなければならぬ。これに対し、政治的リーダーを選出する場合に必要とされるのは最少限、政治決定から生じた具体的結果についての判断能力である。前者は、高度の専門的な知識を必要とするのに対し、後者を選挙民に要請することはおそらく非現実的なことではないであろう。シュンペターの新しい民主主義のモデルはこの区別を前提として、一方で政治決定に対する第一義的役割をリーダーに与えることによって、リーダーの政治的責任を明確にす

るとともに、他方で、リーダーのコントロールという媒介を通じ民衆の政治への合理的な参加を確保しようとするのである。⁹⁾
 自分の価値体系を確立せよという要請は、それが価値と現実の社会との相互関係の問題を見失うならば、政治研究にとっては、ほとんど意味をなさないかもしれない。しかし、それは現代社会に支配的傾向である価値意識喪失の現状に対しては、「警句」的批判として意味があると云える。一般的に云って、ある社会における既存の価値的前提の一致が崩壊する場合には、価値意識の尖锐な対立が現われることが多い。このような事態は、人々を自己の価値体系を再構成し、定式化し、この価値体系を通じて、社会的・政治的出来事を判断し、自己の行動を決定することを強制するであろう。これに対し、一致があると感じられている場合には、人々は社会に現に適用している無定型な価値意識を代用することによって、自分の価値体系を定式化しなくておきがちである。しかし、現代社会は不断の変化にさらされている。しかもこの変化は「ピース・ミール」な変化としてしか現われない。このような状況において、無定型な価値基準によって、この変化に適用しようとする場合には、実際の基準は他人の意見・感情あるいは他人の生活そのものにならざるを得ない。しかし価値の充足という点では、人々は他人と同じであることでは満足出来ない。彼らは

他人よりも少しだけ多い充足を追求する。かくして、人々は真に自分が何を望んでいるかを知らないから、他人との差別にたえず心を向け、皮相的なものへの関心は著しく強められる。選択の一つ一つは価値体系と無関係であり、内面的に統一されてはいない。

したがって皮相的なものへの関心が強ければ強い程、人格は分裂し、それが満足させられても人々は生の充足を感ずることは出来ない。内面的価値基準のない生活は、不安や不満を再生産せずにはいない。現代社会にみられる価値意識の微温的一致は、むしろ社会のより深部に不安を増大させている。このような状況の中で皮相的満足を求める人々に向かって、「何のために」という問を發するとは、確かにそれだけでも意味あることにちがいない。

- (1) de Jouvenel, B. 'On the Nature of Political Science' (A. P. S. R., Vol. 55 No. 4 1962) p. 775.
- (2) B・ラッセル「宗教は必要か」(大竹勝計・荒地出版社) 七四頁
- (3) Weldon, T. D. 'The Vocabulary of Politics' p. 147-175.
(永井陽之助訳「政治の論理」)
A・J・エイヤー「言語・真理・論理」(吉田夏彦訳・岩波書店) 一三五—一三七頁。
- (4) Strauss, L. 'What is Political Philosophy, and Other Studies' (1956) p. 20., Greaves, H. R. 'Political Theory Today' (Pol. Sci. Q., Vol. 75 No. 1 1960) p. 2-3.

- (5) Easton, D. 'The Political System' (1963) p. 223-265
- (6) Cobban, A. 'The Decline of Political Theory' (Pol. Sci. Q., Vol. 68 No. 3 1953).

(7) Easton, *Ibid.*, p. 307-314

- (8) J・A・シュンペーター「資本主義・社会主義・民主主義」中(中山伊知郎・東畑精一訳・東洋経済新報社) 四六五—五一〇頁。
シュンペーターの、この新しい民主主義のモデルに対して多くの批判がなされるかもしれない。例えば P・H パートリッジは、このモデルが人民の政治参加をリーダーの選出に限定している点を批判し、次のように云っている「有効な社会的責任をわかもつために、公共の仕事の運用や管理への参加の機会を増大させ、平等にすることを民主主義と結びつけることが、民主主義思想の一つの重要な特徴であった。この立場からすれば、民主主義理論の仕事の一つは、自治、すなわち公共の仕事の運用への参加を拡大することを可能にする手段を探究することである」(Partridge, P. H. 'Politics Philosophy, Ideology' Pol. Studies, Vol. 9 No. 3 1961 p. 232-233) しかし当面の目的のためには、この点についての議論にたちいる必要はないであらう。ここではシュンペーターのモデルは現実社会の変化に対応する政治的觀念の「改鑄」の試みの一例としてとり上げられているにすぎない。